

北海道軌電競走

創刊号



競走の公正とは 競馬のすべてである

レースの公正ということは競馬のすべてである

この一点に競馬が栄えるか亡びるかが かかっている

公正でなければ 競馬はスポーツでもなく ギャンブルですらない

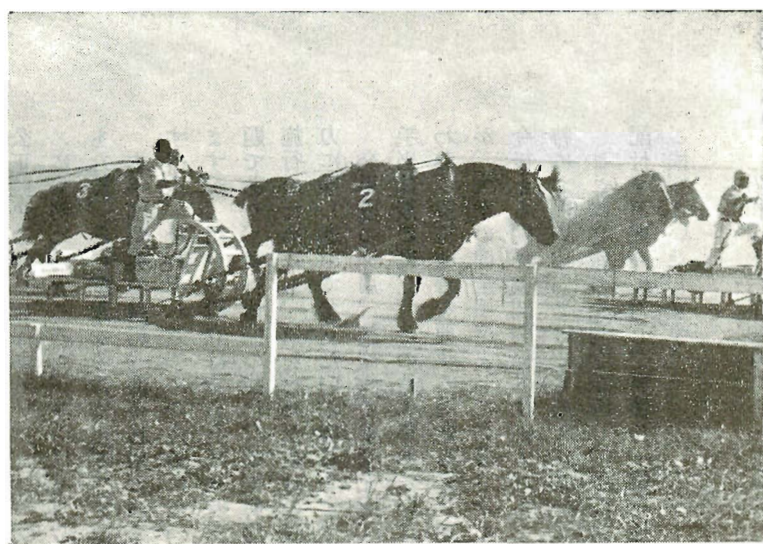
競馬の公正をはかるために 主催者がどんなに心をくだいても

決してやりすぎるといふことは あり得ない

自治体競馬がもう二十余年もつづいている

レースの公正をおろそかにするならば これほど大きな公害はない
だろう

(I紙より)



会報発刊に寄せて

北海道市営競馬協議会

会長 五十嵐 広 三



本会会報の発刊にあたり謹んでみなさまのご健勝をおよろこび申しあげます。

昭和二十八年、岩見沢市、帯広市、北見市および旭川市の四市が地方競馬を施行して以来、十九年目、また、昭和四十三年市営競馬の推進母体として相互の連絡協調と円滑な運営発展に寄与するため、本会が設立されてから四年目を迎えました。

その間、市営競馬は、年々、めざましい伸張指りをみせておりますことは、農林省、北海道、地方競馬全国協会、全国公営競馬主催者協議会等、関係機関のご指導、ご協力の賜ものであり、深く感銘を覚えますとともに、ご同慶に堪えないしだいでありませう。

いうまでもなく、地方競馬施行の本旨は、

健全な娯楽の提供、馬事を含む畜産の振興と地方公共団体の自主財源の賦与をねらいとしているものであり、収益金は農林畜産振興を始め、各般の諸施策に広く、また住民サービースに大きく還元されているところでありませう。

昭和四十五年度の市営競馬は延べ十一回六十六日間開催されたわけではありますが、勝馬投票券の発売総額は二十四億八千七百万円、入場人員は一五万七千人と伸び率は、それぞれ、前年度に比し一一九%、一〇六%を示し、市営競馬の発足当時に想いを馳せましますまさに隔世の感があります。

競馬は馬を走らせ、馬券を売る競技であり、ファン大衆の支持によってのみ支えられ、その強い支持がなければ存続もあり得ないものであります。

大衆の支持は主催者はもちろんのこと、馬主、騎手、きゆう務員、管理者など関係者一丸となって公正競馬に徹することにより始めて得られるものであり、とくに公営競技に対

する世論の厳しい現在、私どもはその決意を新たにする必要があろうかと存じます。

このようなことから、昨年度は薬物検査の実施、競走用橋、重量物の改善、発馬枠の試用、馬体重の測定、諸手当の新設、増額等、公正競馬の維持確保あるいは、ファンサービースにも努めたところで、幸いにも事故の発生もなく、その成果をみる事ができました。本年は懸案の競馬一部事務組合の発足年とすべく、それぞれ煮つめの段階に至っておりますが、組合の設立は本会発足当時から課題であり、執行体制の強化、公正明朗な競馬施行のためにも、道を含めた組合の設立を強力に推し進めて参りたいと存じます。

発馬機の採用、諸施設の整備充実、賞金諸手当体型の確立、その他本年あるいは将来にわたり実施改善を要する問題も多々ありますが、大衆の健全娯楽として発展させるため、今後とも関係機関各位絶大なるご指導を特にお願ひ申しあげるものでございます。

ここに会報の発刊を企画し、その第一号を配付する機会に対し、所懐の一端を述べて、ご挨拶といたします。

昭和四十六年四月

公営ばんえい

競馬の誕生

大久保 吉 蔵

軽種馬の競馬は歴史も古く技術的にも競馬ルールにおいて研究が重ねられ、今日の繁栄ぶりを見せているが、重種馬の競馬は農村の祭典競馬から公営化に移行してから二十有余年の開催歴の中でこの間関係者のたゆまざる努力により年々ファンの増加と地についた競馬になりつつあるが、まだまだ改善と研究を重ねなお一層の努力が必要である。

公営化された当時の状況を思いだしながら一筆書くことに致しましたが、その時期は昭和二十四年五月初旬五十嵐栄三郎氏宅に当時上川生産連畜産課長松田貞二郎氏と私が呼び出され、何事かと思いつつ集ったところ、道営でばん馬競走を

開催するよう道知事に陳情するからその文案を作成してほしいとの指示により早速松田氏と打合せしながら半日がかりで作成し翌日朝の汽車で出札する、陳情者は旭川市長と旭川地方運搬業協同組合長連名で提出することとなり、当日の陳情者は五十嵐栄三郎、斎藤蔵吉(当時道会議員)、久居利男、松田貞二郎の四氏と私の五人である、札幌駅到着後早速畜産会館(元道馬四組合連合会事務所)二階

にある道農務部競馬課長伐伯蔵一氏に趣旨説明し、知事室におもむき面会を乞う田中知事不在のため副知事の福田藤楠氏に陳情することとなり、その内容は産業用馬の育成と能力増進、馬質の改良向上を図ることが趣旨であり、早期実施を要望し、当年八月お盆にばん馬競走を旭川競馬場で開催されるよう事務手続きを進めてほしいと強く申し入れたところ、条例改正など道議会提案が時間的に間に合いそうもないとの話しもあったが強引に要望し、最終的に希望にそうよう努力するとの確答を得たので帰旭する。

その後も五十嵐氏は斎藤道議と福田副知事に再三にわたり電話にて要請を続けたのである。

五十嵐氏の熱心な要請と斎藤道議の努力、副田副知事以下佐伯課長並びに競馬課担当職員の見解のもとに、八月十五、六日の二日間に道営第一回ばん馬競走と名づけて旭川競馬で世界で初めての競馬法にもとづく重種馬の競馬が誕生し開催されたのである。

(旭川市農政部長)

△ 開催回数が増加なる

昭和四十三年以来ばんえい競馬主催四市と本会は道の支援の下に、競馬開催回数の増加陳情を重ねてきたが、農林省はその実情を認め本年度のばんえい競馬に対し一回の開催を増加し過般その指示をした。本年は岩見沢でこれを実施し明年は帯広市において開催される見込みである。これによつてばんえい競馬は十二回となり本道の省令で定める回数は二十八回となった。

△ 一部事務組合結成のうき

本道市営競馬主催四市は昨年十一月十一日岩見沢市において本会臨時総会(助役会議)を開催し、多年の懸案である一部事務組合の結成について協議し、本年一月十六日札幌市において再び臨時総会を開催して本年十二月一日発足を目標として設立準備を進めることに決議した。

△ 道の道営競馬改革案公表

一道は昨年道営競馬に発生した一連の黒い霧事件の対策として、道営競馬の改革を目指し実施条例の改正、執務体制の強化、施設の新設増築など大幅な改革案を練っていたが、過般四月一日その方針を発表した。その中で、異色と思われるのは馬券発売制限で、一人一回五〇〇〇円以上の発売を制限したことである。

△ 北見競馬場移転新設 工事に着手

北見市はかねて現在東陵町にある競馬場を若松町に移転新設の計画をたてていたが、いよいよ昨年十月から工事に着手、連日十数台のブルドーザーが轟音をとどろかして整地にかかり第一期の工事を終った。

本年は、その第二年度で整地を続行する、新競馬場は公園、スキー場、温泉地帯に囲まれ、北辺の地にみる風光明媚な丘陵で、新しい競馬場がどんな姿を出現するか完成が待たれる。



ばんえい競走とは どんな競走か

内 田 靖 夫

(北海道市管競馬協議会事務局長)

まんが うちだやすを

1 ばんえい競走のおこり

もともと競馬というものは、馬力を利用する人間の生活の中から自然に発生したもので、古代の人達が人間の力以上の仕事をしたいという気持ち、人間の働きをより大きく、より多く、より便利にしようとする智慧から、従順で運動性に富み力の強い馬を利用する発明が生れ、それが人間生活に定着すると、やがて競争心、娯楽、尚武と結びついて馬の競走をやるようになった。競馬としての形をなしたのは記録によると、「欧州における競馬はその起源頗る古く、西暦紀元前七七六年以来四年毎に挙行せられたる、かの有名なるギリシヤのオリンピック祭の第二三回にあたり、馬車競走をその競技中に加えたるに端を発し、その第三三回において騎乗競走を行ないたるを嚆矢とする」とあり、また日本の競馬の起源としては、「本邦にあつては、文武天皇の大

宝元年五月五日(紀元一三六一年)群臣五位以上をして走馬を出さしめ、天皇臨観す、とあるを史上競馬を記するのはじめとす」とある。

競馬のおこりが馬車競走であつたという事は、軽い車のレースであらうがまことに面白いことで、ばんえい競走は歴史が浅いといわれるが、事實は普通の競馬より兄貴分だったのである。このように人間の生活のあるところ競馬があり、自由主義国も社会主義国も競馬はやってゐる。

ばんえい競走も同じように北海道開拓農民の敝しい生活環境の中から湧き出るように発生した。

はじめは綱引きのように二頭の馬がたがいに引っぱり合うやり方で、そのあとには荷馬車の車を歯止めにして動かさないようにし、人間が乗り、何人乗せて引っぱつたという事で力を競いあつたり、



馬の値段をきめたりした。今のような櫓に重い物に乗せてやる方法は明治の末期頃からだといわれている。

櫓に乗って馬を馱することは本道独特のもので内地方面ではみられないやり方である。ばん馬競走の盛んな青森県では櫓に乗らないで馱者は馬の口を取り地面で引っぱつたり、追つたりする方法でやっている。

これは開拓の頃外人指導者達が馬車、ブラオ、中耕除草などすべて一人馱法でやることを教えたことが身について、北海道の人馬は一人馱法を伝統として受け継いだ。

2 競馬法に入れられたばんえい競走

一般に競馬といえば、馬券を発売してやる競馬をいい、祭典や記念行事として行なわれる競馬は、お祭りばん馬とか記念競馬とかいって、おたがいの馬の強さを誇つたり、酒を汲みかわして大いに楽しむ農村のレクリエーションであつて、法の規制を受けない素朴な行事として今でも盛に行なわれている。

戦後ばんえい競走が競馬法にとり上げられた。これは敗戦の空洞から生れた珍しい競馬で世界にも類例がない。

これでばんえい競走は平地、速歩、障害競走と肩を並べて競馬法の規定の中でやれるようになった。

3 ばんえい競馬の馬

一般の競馬はあの軽やかでスマートなサラブレッド種、アラブ種で行なわれる。原産はサラブレッドが英国、アラブは主としてアラブ地方である。

ばんえい競走馬は仏国原産のベルシュロン種とその混血の重歩種、これも仏国産のブルトン種である。過去において重種のブラバンソン、クライズデル、シャイア、サツフォーク、中間種重量型のコブ型ノルマン種などが輸入されて農機用馬の改良を試みたが、けっきょく力量、機動性、風土への順応性などからベルシュロン、ブルトンが一番適しているということになった。

今でも毎年三、四頭の種牡馬が輸入されているが、サラブレッドが人間の作った競走を象徴する芸術品ならベルシュロンは堂々たる偉観他を庄する重厚な芸術品といえる。



競馬のくらべんこ

4 本道産業上馬産振興との関係
サラ系アラ系は競走用につくられる馬であるから、その生産はいわゆるレジャー産業といえる。現在のような競馬ブーム時代には生産も激増しているが、全国に六五%を生産している本道としては重要な産業である。

ばんえい競走馬は農、ばん用に使役されている馬の中から選ばれて出てくるのであるから、本道の産業とまったく密着しているものである。産業用馬の維持改良は即ばんえい競走馬の維持改良ということになる。

近頃農林業の機械化が進み、馬力利用の稼ぎ場が減少しており、馬の頭数もなだれのように落下して、最近では年々一万二千頭位づつ減っている。ばんえい競走は馬資源の面から将来性に疑問を持つ向もあるが、本道の地形風土などから考えると、馬の働く場所、小廻りのきく機動性、人間にかわる柔軟な感性などからただちに機械に交代することが困難な面もあり、とくに本道の開拓を成し遂げた人と馬の親密性、馬好き連中などを含めて、そう簡単に資源が涸渇するとは考えられない。いつかはこの落調も鈍化し停止するものと思われる。したがってばんえい競馬はそう簡単には終末を迎えることはないだろう。

一般競馬は昨年一年間に地方競馬が二一〇日、中央競馬は二八六日、計二三九六日開催されており、ばんえい競馬は四競馬場六六日だから将来仮りに開催が

増加したとしても馬資源には困るようなことはあるまい。

現にばんえい競馬に出てくる馬は年々増加する傾向をみせ、昨年は四八五頭出場し能力試験で三四二頭が合格している。

毎年産業用馬改良のため種牡馬が輸入されていることは前述したが、その購入先であるフランスは世界有数の馬産国であって、なぜ生産が衰えないか、それは重要な動物蛋白質資源になっているからである。

ばんえい競走馬資源の基盤は、本道の馬力を利用する産業そのものであって、その維持振興はばんえい競馬に密着していることが一つの特徴ともいえる。ここに現酪農大講師田垣住雄氏の文献をかりて述べてみよう。

5 馬産振興上ばんえい競走の意義
「ばんえい競走は体重が基本になって強力なばん力を発動するが、競走の勝敗ではとくにばんえい意志力の強弱、持久力の強弱が影響する。

重大格の馬はとかく鈍重に陥りやすく、その鈍重化を防ぐにはいろいろな繁殖上や育成上の技術が進められる。そんな技術方式よりもばんえい競走を励行すれば自然にばんえい意思力の強い持久力のあるものが優性になるのでこの競走は重大格馬の鈍重化を阻止する役割を持っている。

体重だけ偉大であっても鈍重で意思力のとぼしいものではばんえい競走馬に不

向であるということが、きわめて馬産上に有意義であるばかりでなく、それが北海道農ばん馬の資格として符合するところにこの地方競馬は重大な意義がある。

農用、冬山造材その他のばん用など産業に通ずる競馬として、また農村に通ずるレクリエーションとして大衆の盛り上げる意欲から、だんだん今日まで進歩してきたばんえい競馬は北海道の大きな特色である」

つまり馬産地北海道の地方競馬は市営開催といえども従来馬産振興と畜産関連産業の振興を旗印としており、市によってはその収益を畜産振興資金として積立て、開催目的を明確にしているところもある。

ばんえい競馬こそは本道産業上重要な意義があり馬産振興に寄与する開催である。関係者はこのことに誇りをもって競走の公正を期し、目的達成に汚点を残してはならない。

6 馬にとってはらかなスポーツ
近頃「観性」とか「しごき」とか「特訓」とかいつて人間のスポーツにはモータリツ訓練が行なわれている。

同じように競走馬にも激しい調教が行なわれる。一般の競馬は騎手が騎乗したり、けい鶏車に乗ったりしていかにも軽やかに見える。ばんえい競走は重い物をひっぱる競走で、レースのときの負担重量は大体重と同量となっているが調教のときは特別な場合を除き重量を軽くしてやっている。

コースには三ツの障害があるが、テンションメーターで計ってみると、平坦地を引いているときの重さは実際重量の二、三割軽くなり、障害を登るときは五割方重くなることがわかる。

ばんえい競走ではときに膝をつき、横によじれ転倒する馬がいる。とくにそれは障害登坂のときに多い、それを見て可愛そうだ、惨酷だという人がいる。

登坂のときには前述のように実際重量の五割以上も重くなるので、騎手の多くは一気に登る戦法をとらずに馬の状態と馬場状況をみて、いわゆる一寸引き駄法をやる。

馬の働えい力とは瞬間働力と使役働力がある、前者は一瞬間に勢をつけて引っぱる働力で、後者は馬の疲労度を計算に入れた一日の稼働できる働力をいうのである。

ばんえい競走では登坂する際は瞬間働力を利用したいわゆる一寸引き駄法をやり、平坦地では、重量物を引くという競走働力を發揮する。それは瞬間働力や使役働力とはまた違ったものである。

よくわれわれは障害を越せなくてドンジリになった馬が、ようやく障害を超えると喜々として走ってくるのを見る。

これは力がないのか調教が不十分かで障害を越す意欲がなく、それを超えてらくになると喜んでねてくるのである。

ばんえい競走は馬にとって楽なスポーツとはいえないかもしれないが、少なくとも一般競馬と比較すると楽である

ということはいえる。

それは平地競馬の外傷事故死がばんえい競走に比較して問題にならないほど多いことでもわかる。

平地競走は秒速十八米位の猛烈なスピードで地面を蹴って空間を飛行し、地面に激突するものであるから、その筋腱骨節にかかる負担は大変なものなのである。最近三年間の競馬期間中の死亡および負傷馬を比較してみると次のとおりである。

(1) 道営競馬(平地)

年次	区分	外傷	一般病	計
四三	死亡	一三頭	七頭	二〇頭
	重傷	二六〇	一	二六〇
	死亡	一三〇	一	一四〇
	重傷	四五〇	一	四六〇
	死亡	七〇	三〇	一〇〇
四五	重傷	五一〇	二〇	五三〇
	外傷事故による死亡	三三三頭	(競走中心臓麻痺とん死。切迫と殺を含む)	
	重傷	(休業一カ月以上および障害用馬) 一二二頭		
	その他平病死	一一頭	平重病馬三頭	
	合計	外傷事故による死亡	三三三頭	(競走中心臓麻痺とん死。切迫と殺を含む)
三〇	死亡	一三頭	七頭	二〇頭
	重傷	二六〇	一	二六〇
	死亡	一三〇	一	一四〇
	重傷	四五〇	一	四六〇
	死亡	七〇	三〇	一〇〇
四五	重傷	五一〇	二〇	五三〇
	外傷事故による死亡	三三三頭	(競走中心臓麻痺とん死。切迫と殺を含む)	
	重傷	(休業一カ月以上および障害用馬) 一二二頭		
	その他平病死	一一頭	平重病馬三頭	
	合計	外傷事故による死亡	三三三頭	(競走中心臓麻痺とん死。切迫と殺を含む)
四三	死亡	一三頭	七頭	二〇頭
	重傷	二六〇	一	二六〇
	死亡	一三〇	一	一四〇
	重傷	四五〇	一	四六〇
	死亡	七〇	三〇	一〇〇
四五	重傷	五一〇	二〇	五三〇
	外傷事故による死亡	三三三頭	(競走中心臓麻痺とん死。切迫と殺を含む)	
	重傷	(休業一カ月以上および障害用馬) 一二二頭		
	その他平病死	一一頭	平重病馬三頭	
	合計	外傷事故による死亡	三三三頭	(競走中心臓麻痺とん死。切迫と殺を含む)

年次	区分	外傷	一般病	計
四四	死亡	二〇	二	二二
	重傷	二二〇	一	二二一
	死亡	一〇	三	一三
	重傷	四五〇	一	四五〇
	死亡	七〇	三〇	一〇〇
四五	重傷	五一〇	二〇	五三〇
	外傷事故による死亡	四四頭	(内三頭は心臓麻痺とん死)	
	重傷	(休業一カ月以上および障害用馬) 一二二頭		
	その他平病死	一一頭	平重病馬三頭	
	合計	外傷事故による死亡	四四頭	(内三頭は心臓麻痺とん死)

右の表によれば四十三年から四十五年まで三年間に死亡したり重症になった馬は外傷事故一般病ひっくりかえりて平地競馬では一六九頭、ばんえい競馬ではわずか一二頭でしかない。

以前動物愛護協会からばんえい競馬は苛酷であるという抗議を受けたが、一般スポーツ、平地競馬に比較して決して酷苛な競走ではないし、これをやめろということは今もお盛んに行なわれている農村の楽しく素朴なばん馬競走をも取上げることになるので、切にご理解をいただきたいと思う。

この問題とは別にばんえい競走は力と速度のレースだが、力くらべに重点をおかず、スピード感のあるレースにするため負担重量の軽量化について検討がすすめられている。

7 ばんえい競走の特殊性

ばんえい競走は競走中停止するという特殊なレースであるため技術上能力發揮の判定が困難だと想像する人もあるが、競走中停止するのは平地競走の「ある区間をひかえる(押える)または馬なり」に走らせる騎乗法と同じであってとくに



判定が困難とは思われない。

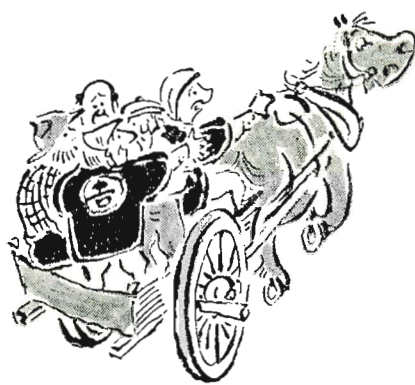
通常平地競走で馬をひかえるのは、馬の全能力を發揮するためにはスタートからゴールまで全力疾走するとバテるから

途中息を入れて適当な距離（俗に三分三厘というあたり）から追い上げるといふ戦法をとるからである。

千メートル以下の競走では終始追い切るが、人間のスポーツでも実力ある老練選手は百米の短距離でさえも途中若干の余裕をつけて追い込むという走法をとるともいわれ、適切な能力の配分によって馬自体の全能力を十二分に發揮することが理想とされている。

アメリカの競馬は距離の長短に關係なく全コース全力疾走をやるいわゆる消耗競馬ともいわれるが、日本の騎乗技術はそうなっていない、もしその戦法で負けると暴走ともとられることがある。

ばんえい競走では第三障害前ではほとんどかならず馬をとめて息を入れる。その時間は普通七秒から八秒くらいが理想といわれているが、馬の団体、後続馬と



の距離などによって違ふ。お客さんから声がかかるのは「急ぐな慌てるなッ」というのが不思議に多い、騎手は機敏にチャンスを捕えて追いあげるのである。

第三障害前では一寸引き取法をやるが、これは前記したように登坂には実際重量の五割以上も重くなるから一気に登ることが無理なのである。その気合い、動作、馬の動きなどを見て能力発揮の状態を判定するのである。第三障害以外の箇所では第二障害前と通過のとき停めることがある。

そのほかは馬に能力がないか、頑張りがないかで馬自らがとまってしまう場合があるが、騎手がとめるということとはほとんどない。

8 騎手さん

一般の競馬と同じように地方競馬全国協会の免許を受けなければ騎手にはなれない。

昨年の騎手試験を受けた者は一四一名合格者は一二七名あったが、そのうち各競馬場に毎年騎乗しているいわゆるプロと見られる人達は約七〇名である。

面白いのは合格者のうち六〇％は農家、一五％は運搬業、一五％は家畜商、あとの一〇％が各種職業やばんえい専門騎手となっている。平地競走では目方の軽い騎手が少年時代から厩舎で生活し、対社会的には隔絶された環境で人となる。いわゆる生粋の競馬人だが、ばんえい競馬の騎手は社会的にも充分暮らせる資力のある人が多い。もちろんプロとして

の技術を要求されているが年間二千万円位の収入がある連中もあり、異色の競馬タイプである。

騎手は馬管理者、調騎兼乗騎手、専業騎手とあり、馬管理者は厩舎の管理責任者（組長のようなもの）調騎兼業は馬の調教管理の責任者、騎手は騎乗専門である。

9 コース

幅一米八〇のコースが十本並び、距離は二〇〇米、現在のばんえい競走は十頭が限度となっている。

中山競馬場はゴールに向かって上り勾配、淀の馬場はバンクットがあるなど競馬場によって走路の形が違っているようにばんえい走路も、ところによって多少の相違がある。

大体第一障害は高さ一米、第二は距離二〇米高さ五〇cmの砂障害、第三は一米六〇位で最後の難関となっている。

セパレートコースなので走路の均等については係員は心を砕いている。昨年からテンションメーターを使用して各走路の重量抵抗を検査したり、ときには櫓を引いて使用度数を平均にしたり、修理技術も多年の経験でなかなかうまい。昭和四十三年の全走路について、三着以内に入った頭数を調べてみた表があるが次のとおりである。

この表をみると勝敗はコースの別によるものでなく、同じような能力の馬があるコースにかたよった偶然性が数字に現われるのであって、コースによって勝

コース		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
競馬場	旭川	95	105	112	101	73	92	85	91	70	40
	岩見	93	71	69	75	68	54	77	38	46	57
	帯広	62	57	40	35	49	49	44	47	36	13
	北見	53	49	46	48	49	34	36	38	42	37
	計	303	282	267	259	239	229	242	214	194	147
平均	75.7	70.5	66.7	64.7	59.7	57.2	65.5	53.5	48.5	36.7	

敗を決する要素はほとんどないとみてよい。

外側コースの入着馬が少ないのは出走頭数が少なく、外側のコースを使わないレースがあったからで、年間全七九二レースの出走頭数は次のとおりとなっている。

頭数	使用コース数	レース数	コースを使用したレース数
一	〇	五八七	二〇五
二	一	一三一	七四
三	二	四八	二六
四	三	一六	一〇
五	四	八	二
六	五	二	〇
七	六	〇	〇
八	七	〇	〇
九	八	〇	〇
十	九	〇	〇

10 選手村入厩

競馬のはじまる二〇日前に競走番組が公表される、主催者係員は競馬の開催地へ行って入厩馬の申込を受付る、申込のできる者は馬管理者に限られている。

厩舎には委員会があつて、不正に対する自衛警備、清潔整頓など厩舎生活の環境改善、賭博暴行など不法行為の取締、厩舎内出入りなど秩序維持について自主規制を行なっている。

11 馬検査

出走する全馬は馬名登録、特徴照合、健康、体重計量、能力調教の馬検査を受け合格しなければならない。

馬名登録とはその馬が競馬に出る間と同じ名前前で走らなければならないために行なう。その名前は全国でただ一つしかない。登録証には血統、性、毛色、年令、特徴のほか競走成績が記録される。要するにその馬を固定するというものである。ことしの第一回馬体検査は旭川で五月十五日から三日間の予定でやることになっている。

12 調教

冬半年の休催期間中多くの騎手と馬は冬山造材や客土の労働で体を鍛える、また労働につかない馬は冬道や原っぱで調教される。二才馬は競馬が終る頃から馬具を見せたりつけたりとところから馴らされる。シーズンがくると早くも厩舎に入って本格的な調教を受けるのである。

ばん馬が平常仕事をするときの引き出

しはジツクリと出るのがよいが、競走ではスタートから猛然と飛び出して行かねばならぬ、途行斜行やよじれがあつては失格となつてしまう。重量物を引つばるといふ激しい意思力の訓練、はみ受扶助(騎手の追う動作に対する鋭敏な反応)の教育、頑張りの訓練など苛責のない厳しい調教が行なわれる。

こんなにはげしい調教をされてよく馬は調教師に馴れ親しんでいるものと感心するほどだが、それは、調教とは常に愛撫と懲戒によつて行なわれるからである。もしそれを間違えば馬は恐怖心から卑屈となり形も悪くなつてくる。

能力検査に合格すると調教ゼッケンを渡されるから調教を見に行く人は馬名表と照し合せてそれがナニ馬かを確認されるがよい。

13 全馬能力調教検査

ばんえい競走に出る全馬はその年毎に全馬能力調教検査を受け合格しなければならない。この点はほかの競馬と違つたところではじめてばんえい競走を知る人は驚いてしまふくらいだ。不合格馬は二回三回とこの検査を受けるため競馬場を廻る。随分費用もかかるだろうにと思うが、ばんえいの連中はてん淡としてこの「きめ」に従う、これも意外に財力のあるセミプロが多いことによるものらしい。

14 馬のわけかた(その一、名称)

馬体検査に合格した馬は各クラスに分けられてレースに出る。これは格付区分といつてABC D 3才の五資格に分けら

れる。

四十四年までは甲乙丙丁A、丁B 3才の六段階であつたが、昨年から名称を変えた。それは丁A、丁Bという呼称がおかしくなつたからである。この呼び方はもう十何年前、馬が少ない頃、管内馬と称するクラスがあつて、農耕馬を狩り集めてやつた時代に丁級を二ツに分けて丁Bクラスを設けたことからはじまる。最近では馬が多くなつて丁Aと丁Bの馬が

一番多く、農耕馬を狩り集める必要がなくなつたどころか、最低七〇キロ位の馬が充実してしまつたので、丁級の中のA Bという分けかたは不合理で意味がなくなつてしまつていた。

格付する体重も丁Bは六五〇キロから七〇〇キロまでであつたが、秋頃になると体重が充実して七〇〇キロ以下の馬は三九頭中わずか八頭となり、まことに堂々たる馬ばかりで丁A、丁Bと分ける感じのものでない。

15 馬のわけかた(その二、重量区分)

格付区分の仕方は体重と賞金の稼ぎ高によつてやる。これは別掲にもあるので省略するが、Aは九〇一キロ以上、Bは八一キロから九〇キロまで、Cは七三キロから八一キロ、Dは六五〇キロから七三〇キロの馬で六四九キロ以下の馬は出られない。

体重のとりかたはことし始めて出るときは開催前にはかつた重量で、第二回目以後は開催日に計つた体重の一期平均で定める。

16 体重の重い馬は強い

学説では馬の腕力は「馬と地面の摩擦量の大小に比例する」「体重の大なるものまた腕力も大なり」とするものが多い、しかしこれは瞬間腕力と使役腕力の統計的医学的観察の結果であつて、重量を速く運ぶといふばんえい競走にはそのまま当てはまらない。

四十四、四十五年二カ年の成績を統計的に検討した結果は「体重の重いもの必ずしも成績優秀とはならない、かといつて体重の重いということがなんの価値もないということにもならない、しかしその価値性は固体能力に比較して低く、同じ格付の中で体重が重く、骨肉筋腱充実し、内臓頑健かつ調教が十分で馱法が適切であれば、能力の優秀性は絶対であるといふことはいえる。

そんなわけで第二回目以後の格付では、体重が増加してもすぐには資格を上



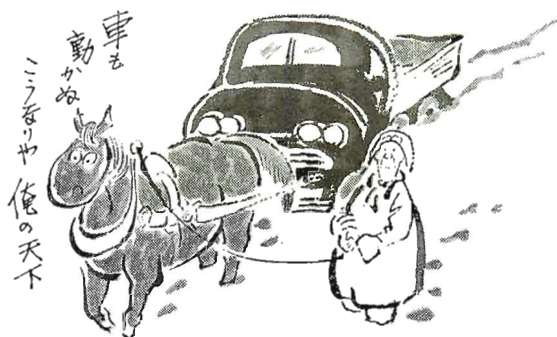
けないこととしてゐる。
17 馬のわけかた(その三、賞金による
区分)

前年走った馬はその成績によつて格付
がきめられるが、それは成績が非常に良
かった馬でほとんどの馬は体重で分けら
れる。

このように初めは体重と前年成績によ
つて馬が区分されるが、そのあとは賞金
の稼ぎ高と一期平均体重で昇級していく
ことになる。

18 ひっぱる重量

馬が競走でひっぱる重量(負担重量)
は昨年までは櫛(二四〇キロ)引木(ド
ッコイ一五キロ)騎手(七二キロ)の総
量に積載重量を加えて概ね馬体重と同量
になるようにしてあつた。



例えば、D級の格付は六五〇キ、から
七〇〇キロの馬で、積載重量は三四〇キ
ロ、櫛引木騎手の重量と合算すると六六
七キロとなり、大体体重と同じくらいの
負担となるのである。その点なかなかう
まくできてゐる。ことしは負担重量を軽
量化するという基本方針をたて各格付と
も軽量となつてゐる。

19 負担重量の研究

前記のとおり馬の「能力」は体重によ
つてのみではきめられないものである。
現にA級や3才馬をみるとよくわかる。

やはりばんえい競走といえども馬は強
い順位で格付区分すべきだ、それを原則
としなければならぬ。体重区分の矛盾
点を是正すべきであるという研究が行な
われつつある。しかし、もし馬を強い順
にならべてみたら大体はやはり体重の重
いものが上位になるだろう。

ことしのやりかたは昨年改正したばか
りだから、若干の手直しだけで実施する
ことになつた。

その研究とともに負担重量の軽量化と
いうことが中央から強く要望されてい
る、これは競走のスピード化、一着から
最後着までの着差の短縮、用具の改善、
競走の公正化対策としての主張である。

20 ハンデキャップレースをやるか

ばんえい競走の特別競走には従来特別
重量、優勝、別定の三レースが各資格別
にあつて、特別に重い重量を全馬同量で
やる特別重量、賞金の稼ぎ高によつてき
められている重量(いわゆる規定)でや

る優勝、番組編成委員が馬場状況などを
みて負担重量をきめてやる別定の三種類
であつた。これは四日制の開催で次から
次へ巡業のようにやってきた日割の忙し
い時代ではやむを得ないやりかたである
が、ほとんど毎年毎回このような定型的
な方法でやるので、競走番組なども一年
分作れるというものだった。

前述したように体重で能力の優劣をき
めることは矛盾があり、各クラスの中で
相当の優劣があるので、最近賞金取得高
によつて重量の加増をしたり馬を分けた
りしている。このやりかたは将来の格付
区分の方法をきめる資料となり、一面体
重によつて馬の優劣がきまらないとい
う示唆ともなつてゐる。

本年はひとつ見込ハンデキャップをや
つてみようかという話がでてゐるが、ば
んえい競走ではほとんど始めての試みで
あるから(以前やったことがあるという
話もあるが、その成績が残されていない
し、記憶している者もないので参考に
ならない)特ハンのようなやりかたはで
きない、やるにしても一番下の負馬レ
ースあたりでやってみる程度であろう。

平地競走のハンデキャップは負担重量
を重くしたり軽くしたりして作るが、こ
のことについては法則も教科書もない、
参考資料はあるがハンデの面倒さや作成
上の心得を詳細に説明しているものであ
る。ただ歴史が古いからある程度の基準
はある、しかしこの基準を素人がそつこ
りそのまま応用したらとんでもないこと

になる。

速歩競走では距離ハンデをつけるが、
各馬がどのくらいの速さで走るかを番組
委員が判断することによつて計算され
る、この場合一ハロンをどのくらいの速
さで走るかを判断することが一番むずか
しいのであつて、例えば一ハロン二〇秒
で走る馬は、一秒に一〇米走り、一八秒
で走る馬は一米一一走るから一ハロン
では二二米のハンデをつければよく、こ
れに走るハロン数を乗ずればハンデ距離
は容易に計算できこれにカンを働かせば
でき上る。

ばんえい競走は平地と同じように負担
重量の加減でハンデをつけることにな
るが、免も角歴史が浅いし、重量と速度の
競争であるから簡単に算出基礎をつかむ
ことはむずかしい。

参考資料によれば「ハンデキャップレ
ースとは一定の距離における二頭以上の
馬の想定された速度または力量に対し
て、ある重量がどのような特定の影響を
およぼすかをテストするレースである」と
いわれ、なお「馬の勝利の機会を均等
ならしめる目的をもつて馬の負担すべき
重量がハンデキャップによつて調整され
るレースである」ともいわれている。

このことからすれば必ずしも適正な計
算によつてハンデを精密に打出してみな
くとも、ハンデキャッパーがテストをし
たり、勝利の機会を均等にしようとする
考えから、成績の調査とカンを働かして
ハンデを作つてもいいということにな

る。

頗る興味がもてるのは平地のハンデキャップは騎手重量によって制限されるので最低四八キロから最高六〇キロ位のところで作らねばならない、ハンデ幅はせいぜい十二キロ位しかないが、ばんえい競走の場合は上下三〇〇キロ位の幅があるところに競馬のハンデキャップの新しい分野として興味がある。

だからといってハンデレースは同じ格付の中の強弱が甚しいときに負馬レースあたりで稀にやってみるのがよく、これがばんえい競馬のやりかたとなつてしまつてはへい害を生ずる。

速歩競走が衰退したのは資源不足から能力の違ひすぎる馬がレースする、つまり追いつくか逃げ切るかのレースとなり、同じ能力の馬が競い合うということにならなかつたことと、審判が面倒だつたといふところにある。見込ハンデキャップはあまりやるべきでない。理想としては馬を多く集めて能力の伯仲する馬群を単位にクラスをつくり、それに相応する規定を工夫すべきであらう。

21 走る条件の承認（出走投票）

翌日の出走馬は負担重量とともに発表され調教師達は騎手をきめて投票する。これはそのレースの一切の条件を承認してレースに出るといふ意志表示である。

このとき投票された馬が六頭以上にならないと、そのレースをつぶし、ほかのレースを新しく編成する、番組委員はいそがしい目にあうのである。

昨年は市によっては俗に前夜版といわれている簡単な出馬表をガリ刷りしてファンに配布している。これを持ち帰り翌日の出走馬をみて勝馬予想をたてること、競馬ファンの一番たのしい時間である。ただばんえい競馬では今日走つた馬が翌日出る場合もあるので、そのようなときは出走投票が遅れ前夜版が出ないことがある。レースの分がのらない場合がある。

22 競走に使う用具

ばんえい競走の競走用具ははみ(天上)手綱ガラわらび型背つり吊り草よび出し胴引かち棒引木楯重量物ひざあて、ローブなどだが、このうちけい駕速歩競走に比較して多いのは、がらわらび型引木重量物ローブの五つである。なにしろ重い物を引つばる競走だから開催ごとに厳重な検査をやり、各用具の重量、長さの計測、補修が徹底的に行なわれる。

長い間木製荷楯を使用してきたが、一昨年一年間研究を重ね競走専門の鉄製楯を使用することになり色彩も木製の自然色から美しい青磁色にかえた。この鉄楯は重さが二四〇キロ木楯より約一〇〇キロ重い、これは重心を低くして安定度を高め、積載重量物一本を減ずることによって労力を軽減すること、また前後を一センチ短かくして障害登陸時の地形適合と重心移動を容易にしたこと、約三センチ広くして横てん、横ぶれを防止し、接地面ズリを広くして摩擦抵抗を減じ、地面へのめり込みを少なくした。そのほか前部三本の重量物固定、足掛け、滑り

どめ、泥よけ板、ひざあてなどをつけ、桁後部の着順写真被写体横サンを従来より倍に高くし馬番を装着した。

重量物は全面鉄板で包み、中味の欠陥を防止し把手を改良して持ち運びを便にした。北見ではことし梶棒にプラスチックを採用するという。鉄楯については四十二年北見がまず試作に着手し、四十四年は同市と市協(市営競馬協議会)で研究試作した。その採用は木そりの欠陥である乾湿枯化による構造の変化、重量の不統一を改善したところに主眼がある。

23 目方をはかる(検査)

ばんえいの検査委員は二人いる。一人は騎手、一人は重量物の係である、ばんえいの騎手重量は七二キロと一定している、軽い騎手は重量箱やバンドを持ってレースの一時前前から一時前前までに検査を受けなければならない。積載重量はすでに目方をはかつてあるので、その個数、結着の状況をよく点検する、レースを終ると再び両委員は後検査と点検確認をして異常のないことを審判委員に報告する。

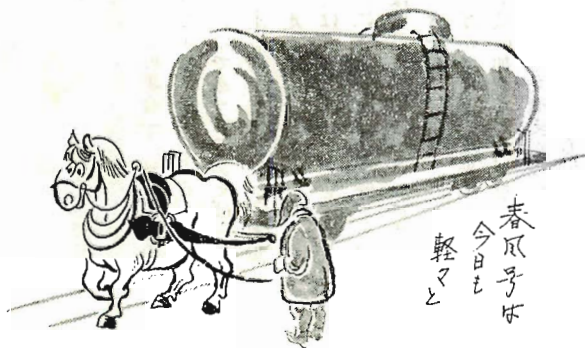
24 レース登場

出走馬はスタート時刻の五〇分前までに装あん所に入る。入るとき体重をはかる、ここでは馬に間違いはないか、蹄鉄に違反はないか、レースに支障のある馬はいないか、馬具におかしなことをしていないか、正しく馬具をつけているかを監視する。出走馬は揃つた、異常なし、馬場管理委員は出走する馬を確定する、

同時に馬券が売り出され、馬は下見所に出る、騎手はスタート時刻の二〇分前に下見所に集合し大体スタートの十七、八分前に馬場に入場するのである、この場合前レースに騎乗して競走中の事情聴取のため騎手が遅れることがあり、ときには騎手がつかないで馬だけで入場することもある。

昨年からばんえいにも誘導馬がつき騎手は乗馬して入場することになった。

市によってはこの誘導馬に北海道名物の土産馬(ドサンコ)を使った、ドサンコは現在本道に混血を加えても二〇〇頭たらずしかないと聞く、往時ダンスケ馬といつてチャリンチャリンと鈴を鳴らしながら五、六頭のドサンコが特有のゲ



春爪予け
今日も
軽マと

ミチ（前足後足を右なら右と同時に出す歩法で、正しくは側対歩といひアチラ語ではベッサーといひてゐる）で走つてくる状態を思い出して頂きたい。

これも北海道開拓の功勞馬である、ドサンコは粗食に耐え持久力に富んでゐる、小柄で馬相は粗野であるが、和種特有の素朴さがある。これが大型のばん馬の前にチョコチョコと走つて誘導してゐるのは笑ましい対照をただおかしさで見るとは申しわけがない。

25 騎手や機などの目じるし

昨年から騎手帽とゼッケンを連勝馬券の枠別に色分けした。一枠から白黒赤青



黄緑橙桃の八色で、これは中央地方とも統一した色である。騎手服は個人ごとに服色を登録し固定してある（別表騎手服一覽表参照）既務員はコバルト色の服装に統一されている。馬には馬番ゼッケン、櫛には後端にナンバプレートをつけて日印としている。

昨年までは既務員服も競走の都度口取りをする人に借し、レースが終ると早速女子従業員にはぎとられていたがことしからは皆自分持ちだ。

こうして服装や標識を統一して馬場内規律を厳正にしようと努めている。

26 スタート

いよいよレースが始まる。

公営ばんえい競馬が始まって以来二〇有余年、スタートは赤旗合図というもつとも古い方法で行なわれてきた。平地競走同様の発馬機を考案すべきだという話はすでに七、八年前からあったが、櫛の後端を固定することを中心に考えていたので、なかなか試作に踏みきれなかつた。またばんえいは他と異り完全駐立ができるので平地競走のような発走の困難な切実感がなかつたことも発馬機の採用をおくらせていた。

昨年旭川市が前方上はね開扉式ともいべきスターティングゲートを試作し数十回の発馬試験を行なつたところ頗る好成績だったので、秋の研究会で最後の好成績をやり本年一挙に本番使用となつた。

これは平地競走のゲートと同じように、前方左右開扉式で日本発馬機KKの製作になり、電気仕かけで十枠一斉に開扉する。これによつて横きれ回転突進胴引またぎなどの事故はなくなり、牝牡の性的チョコカイもできなくなる。口取り既務員の必要もほとんどなくなつていくだろう。

ばんえい競走馬は調教師の調教によつ

てスタートを大体秒速五米から十米くらいで飛び出して行く、ゲートの使用によつてスタートは一層厳正となり一枠一米八〇幅（平地の約二倍）のばんえいゲートの幅容はレース全般の格調をも高めるだろう。

練習用発馬機はI発走委員の考案したものを岩見沢市から三人、市協から三人、工場側から三人出て、過般三月十二日一日一杯かかつて改装また改装、ようやくこれなら大丈夫というところにこぎつけた、これは手動式左右開扉式で誰でも簡単に操作できるゲートである。

27 競走

発走前に走路審判委員が騎手に対し競走上の注意を与えることが通例となつてゐる。騎手は手綱の端を中重量物の把手に結びつける、いよいよスタートである、騎手はきき足を櫛の桁の上におき、脛部を中重量物のひざあてに固定してもう一方の足は足かけに固定する。

スタート//騎手は深い前傾姿勢で猛然と飛び出す。同時にパトロールビデオテープ撮影機、タイム測定フォトチャートは一斉に動き出し、ビデオは馬群を捕えてこれを追いかける。審判員の目は全馬の疾走振りに注がれる、ばんえい競馬の審判は公正係と着順係、走路係に任務が分担されている。

競走はスタートから第一障害をこえるまではスタミナのもつとも充実しているときだから駈でぶつ飛ぶ、それから第二障害をすぎ第三障害前で息入れするま

ではあまり無難をしない、第三障害登坂開始からゴールまでは全力追込む、というのが、ばんえい競走の大まかな走法である。

これは平地競走の追いかたに於ており、スタートダッシュから二〇〇米附近までは全力をもつて好位置につけ、それから控えていわゆる三分三厘あたりから仕掛け直線は全力をもつて追い込むという平地の走法と同じである。ここで問題となるのはレース途中「とまる」競走であることこれは他の競技にはまったくみられないばんえい特有のものである。これを利用して不正が行なわれると恐らくそれを看破する手段はあるまいというのがばんえい競走批判となつてゐる。

これは歴史の浅いばんえい競走の理解が少ないことと、自ら飛び込んで研究に専念していないことによるものと思ふ。このことについて詳述することはすでに昨年二回二日間ビッシリの審判研究会でも時間不足であつたほど膨大にわたるので省略するが「とまる」ということは息を入れることで、騎手が自らの意志でとめるのはすでに前述したとおり第三障害登坂前である、そのほかは馬自体が力つきてとまるか、騎手が馬の状態をみてとめるかで、必ずず停めて息を入れるということは、第三障害前以外にはない。速歩競走の廃止は馬不足と全能力を發揮していかどうかの判定技術が困難であるという結論がなされたからにはほかならない、これを一言にいえば「おさえ

る騎乗法である」からである。馬が全能力を出すときは当然駈歩になる、速歩競走は馬が駈歩になる寸前の能力を、速歩歩法で発揮するレースだから、騎手の騎乗法の中には「追い」且つ「ひかえる」という要素が含まれている。

そこえいくとばんえい競走は歩法の制限がないから騎手は思う存分の駈法動作をもって馬に意志の伝達をはかることができる。

そこに速歩競走と比較して審判は容易である因がある。

しかし八百長は徳義心の欠除から起るものであるから、判定技術以前の問題である。もし乗り役と審判員が見つかるまいぞ見つけるぞというような試合みたいな気持ちでレースをやっていたとしたら競馬も終りだ。八百長ということは幾十幾万のファンをごまかし私慾を肥やす破れん恥極まる行為であることを自覚することがまず第一である。

執務員も騎手も強烈な正義感をもって公正な競馬の実現に努めなければなるまい。

29 ゴールイン

ばんえい競走のゴールインは櫛の後端でみる、だから櫛の後端の横サン(接木)を高くして白色に塗ってある。それでも櫛は低いから馬が重なり合うと写真に写らない。そのためばんえいでは両面から写真をとっている。なおそれでも二頭の馬が重なってその間に櫛後端が入ると両面からも写らない。そこで昨年対面タワ

ーを一六米に高くした。これでもう写らないという心配は解消した。

さてばんえい競走の着順判定写真(フットチャート)について説明してみよう。

◎ シャッターのない写真

レンズの焦点面に二〇分の一ミリという毛髪も油らぬような細いスキ間がタテに開いている写真機、普通の写真はシャッターがあつて瞬間にシャッターが開閉して外景をフィルムにとらえる、瞬間の姿がそのまま写る。

◎ フットチャートはシャッターがないからそのままにしておけばナニも写らない。写そうとする馬の進む方向に合わせフィルムを動かすのである。そうすると走路の柵とかタワーとか固定しているものは流れ、動いている馬と櫛などがフィルムに写る。

1、フィルムは一定の速度で動いているから速い馬は短かく、おそい馬は長くなり、フィルムの速度に合っている馬は正しく写る、とまれれば流れてしまう。

2、この理屈のみこめなくて説明する者とファンの間にもみあいが続くことがある、特に「さし馬」といって後方から速いスピードできた馬が先行馬と同時にゴールインするとこんなトラブルがおきがちである。さし馬は速いから、鼻先は先行馬のあとからゴールインしてもたままそりの後端は先行馬より速くゴールインしていることがある。

3、馬が鼻先をゴールインしてとまり、引っこめればフィルムは鼻先だけをとら

える、これを繰り返すと鼻先だけが点々となつて写ることになる。

4、尻がゴールをすぎたときとまり、けつばるために後退してグンとまた引っぱつたとすると、後退するときは尻尾のほうから胴のほうへ写り、また前に引っぱるから、今度は胴から尻尾へと写る、そのため尻のかたまりに尻尾がくっついてフィルムがでかあがる。

5、例えばまたゴールめがけて右と左から馬がきたとする、この場合フィルムと同じ方向に動いている馬はそのまま写るが、逆からきた馬も鼻先から順々に写っていくからフィルムには前からきた馬と同じ方向を向いて、二頭並んでゴールインしているように写る。

ばんえい競走の着順写真は、ときに奇怪な映像になることがある、それはとまったり後退したりする特殊なレースであるために起る現象なのでファンのかたはよくご理解をいただきたい。

30 勝馬きまる(払戻金の決定)

馬がゴールインする(重量も異常なし、競走途中においてルール違反もない、失格とする事故はない、公正審判委員はゴール到着順位を確定する、同時に的中馬券払戻金を決定して払戻が始まるのである。

一、二着馬は薬物検査のために採尿所に行つて温湯で洗滌された馬房に入る。もし競走上の事情聴取や処分をする騎手があれば公正委員はその処置をして、レース全部の事務は終了する。

鈴を鳴らして馬を引く



31 ばんえいの子想はあたるか

最後にばんえい競馬子想はあたるものかどうかを検討してみよう。どうもギャンプルには八百長がつきもののように考えている人がいる。

競馬は戦前中央、地方とも法律上の認可を受けて施行されておりながら、日本競馬会(いまの中央競馬会)でやる競馬を俗に「公認」といい、畜産団体でやる競馬を「草競馬」あるいはたんに「くさ」ともいった。その俗語の中には根強い不信がかくされてきたようである。

競馬はキング・オブスポーツとかゴールデンスポーツとかいわれて、西欧の習



ぬいでいって
七つやうだいな

價をそのままに「公認」では入場者の服装まで正しくするよう規制していた。いまでも英仏などの競馬にはシルクハットに礼装という習慣が残っており、競馬場はまるで紳士淑女のファッションショーのように、きらびやかで華やかな品位の高い社交場になっている。

戦後公営競馬が発足した当時、地方競馬場は七八カ所もあったが、つぎつぎに廃止して現在は三二カ所となった。その因は競馬不振にあったが、多くはボスの跳梁によって一般の不信を買ったためといわれている。現在開催しているところはそれら悪条件を克服し営々として競馬の公正化に努力してきた地方と自負しても過言でないように思う。

公営以来二十有余年を経たいまの地方競馬をみると、往時の地方と公認というイメージは消え去り、施設の改善、施体制、レース内容とも、個々に差はあれ、ほとんど同等かまたは接近してしまっ

いまでもしかし一步場内に入れば噂は流れがちである。

公正な競馬を行なうために法は不正を行なう者に対し厳罰を規定し、競馬関与禁止というもつとも重い行政処分もすべて不正競馬を対象としており、また調教、騎乗停止処分もすべて不正に関係するものを重課するよう処置している。実に開催執務の主眼はその一点に集中されているごとくである。

さて勝馬予想屋さんは、馬の競走成績と調教の状態とを調査し勝馬を予想するものであるから、各社とも本命対抗人気馬穴馬の予想はある程度似ている。まるきり違う点があるということは当然ではあるが、多くはない。

予想屋さんには既舎情報はきかないように、既舎にはいわないように指導しているが、もし予想業者がいつも特定の既舎情報だけを頼りに予想したとするとおかしなことを生ずる、例えば予想表にするしのないものが勝つたり、しるしのあるものが負けたりすると、その既舎はなにかを企んでいたことになる。したがって予想表を検討することは、各社が正しく勝馬を検討し独自の予想を立てていることを確信して行なわれるものである。

そのことは既舎に八百長計画があるかどうかの検討ともなる。もしごく一部の人が懸念するようにばんえい競走に八百長が多いとすれば予想業者の予想は平地に比較してひどく狂っていることになる。昨年の競馬についてはばんえい競馬一

回六六日間と、平地競馬旭川三回、岩見沢五回、函館一回、計九回五四日間の勝馬予想を検討し的中率を比較してみると別表のとおりになる。

この表によって平地五社の予想にばんえい三社の予想を比較してみると
(一) 予想レース数に対する印的中率(しるしのついたものを組合せると、どれかが的中しているもの)
平地最高七・〇三%、最低二八・四五%、合計平均五五・〇八%に対してばんえい最高六六・四六%、最低六五・六二%、合計平均六六・一五%で平地に比較しばんえいは最高では四・五七%低く、最低では三七・一七%も高く、合計平均では一一・〇七%高い。

これをみるとばんえいの予想は各社概ね平均的中しているが、平地におい



ニレギヤ
ケヨツカイモ
カヤラぬえ

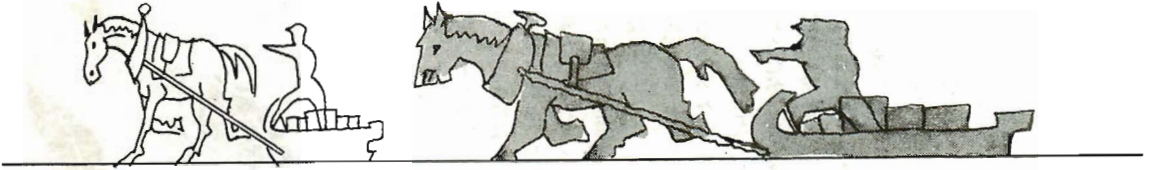
ては一社が離れている。
(二) 予想レース数に対する本命対抗スバリの中率
平地最高一九・三二%、最低一二・一〇%、合計平均一六・四五%に対してばんえい最高一六・四七%、最低一三・四九%、合計平均一五・六一%で平地に比較しばんえいは最高で二・八四%低く、最低では一・三九%高く、合計平均では〇・八四%低い。

これもまた印的中率同様ばんえいにおいては各社の中率は僅少であるが、平地においては一社が離れている。
(三) なお一レース当りの予想数はばんえいにおいては五・一三、平地においては三・九九で平地では一レースについて四箇のしるしをつけることに統一していること。

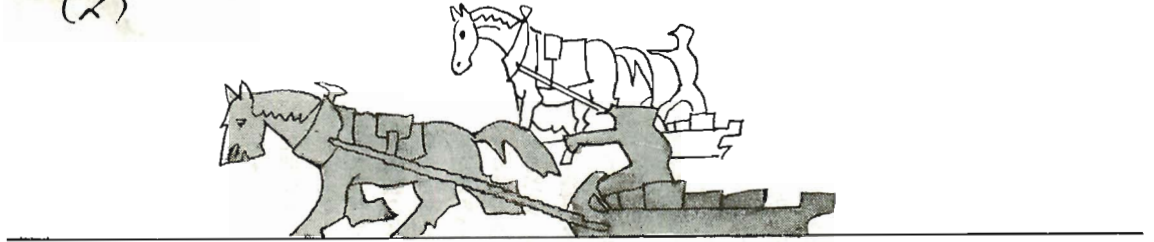
ズバリの的中率は平地において一社を除き一般に高いが、これはばんえい競馬の的中払戻金が高額なことでもうなずける、また平地の調査資料が少ない。(少ないほど率は上がってくる)ことを留意する必要がある。

以上によって推測すると勝馬予想的中率というものは、平地ばんえいともにそう差異はない。それはまたレースが平常に行なわれていることを意味する。ファンのかたは予想表ばかりを頼らずに自分でよく調べて、自ら予想をたてるのが正道であって、予想表はあくまでも勝馬予想であるから、たんに参考として見られるがよいと思う。

(1)



(2)



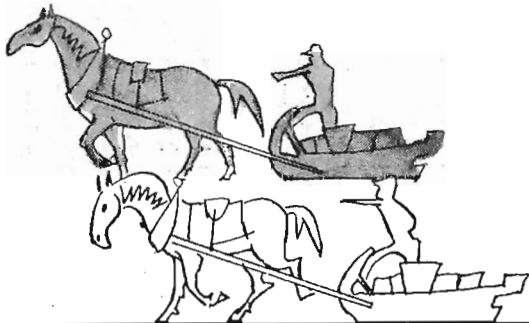
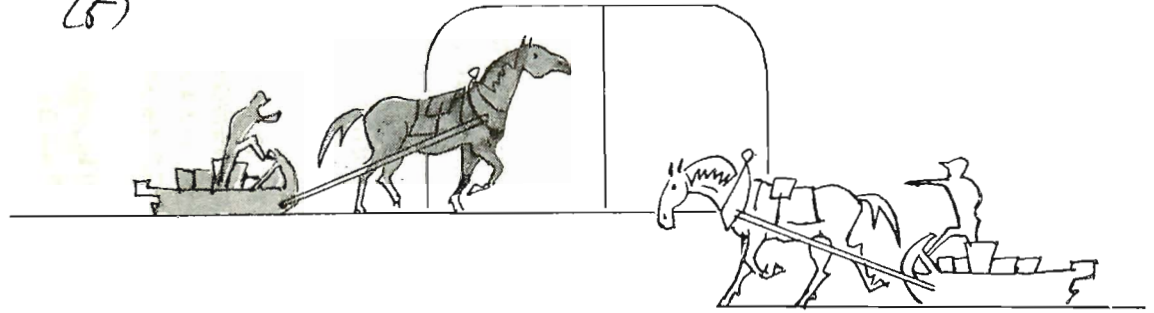
(3)



(4)



(5)

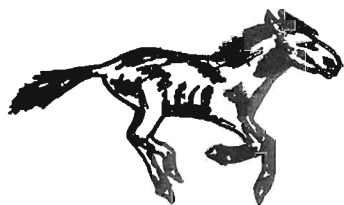




坂本さんの

思い出

坂井清治



今日のばんえい競馬の隆盛を見ると昔のことが、嘘のように思われる。田舎のおやじが、ねじりはち巻をし、ハッピを着て、「オーリヤーオーリヤー」とやっていたとは思われない。

とくに北見競馬場は、日本最北端の最田舎競馬場があつたらしく、当地方のマージャン用語に「網走競馬」「やせ馬の先っ走り」と言う言葉があるところから見て網走にも競馬場があり近代競馬と言われる現在の競馬は、昭和二十二年に競馬の指定をうけ、二十八年から市営、行なっている。北見の場合は、平地競馬は赤字が多く、三十年で中止し三十三年以来、ばんえいより行なっていないので、泥臭さが一段と強いのかも知れない。

昔のばんえい競馬を語るとき、思い出されるのはいまは故人の坂本さんである。昭和三十四、五年頃の北見競馬は出場馬が少なく、とくに稲刈り時期の開催はひどく、前日追馬を集めに回りましたが、坂本さんは、嫌な顔されずに、馬体

検査をよくしてくれました。

坂本さんの馬体検査、資格別に分ける能力は、独特なものがあつた馬主が、変な「いちゃもん」を付けても受け付けず自分の思うようにやっていたが、いつも間違いが無いには驚ろいた。また当時は、走路もU字型でとくに北見の馬場は、発走からコーナーまでは下り勾配になつていたので、雨が降ると、とても危険な状態であつたが、その中を大きな声を出して審判をやり、騎手に注意をし、ファンの抗議を納得させていた。障害も毎朝鍛えを持ち出して人夫の先頭に立つて修正したり、雨が降ると早く競馬場にきて走路の水はけに努めていた姿は、いま思い出しても、頭が下がる思いがする。当時の田舎競馬と同じものを、まがりなりにも馬券の売れるものにし、現在の基礎を作つた、坂本さんを、あの酒を愛し、高瀬さんの高声でうたった歌とともに忘れることはできない。

(北見市畜産係長)

(別表)

勝馬予想成績調

ばんえい競馬(66日 668レース) Ⅱ

社名	予想レース数	予想数	印的中数	レース数に対する印的中率	予想数に対する印的中率	本命対抗的中数	レース数に対する本命的的中率	摘	要
A	668	3,485	444	66.46%	12.74%	10	15.42%		
B	668	3,460	443	66.37	12.80	110	16.47		
C	608	3,031	399	65.02	13.16	82	13.49		60レース減
計	延 1,944	9,976	1,286	66.15	12.89	295	15.61		減は北見1回分減

平地競馬(54日 561レース)

D	471	2,175	134	28.45%	6.16%	57	12.10%		90レース減
E	466	1,914	299	64.16	15.62	83	17.85		"
F	290	1,322	206	71.03	15.58	56	19.31		"
G	471	2,118	287	60.93	13.55	78	16.56		"
H	290	1,118	169	58.27	15.11	54	18.62		"
計	延 8,647	1,988	1,095	55.08	12.66	328	16.45		減は資料蒐集不足による

(注) 1. 予想レース数とは調査した予想表のレース数

2. 予想数とは本命, 対抗, 人気馬, 穴馬, 注意馬等しるしをついた全部の数

3. 印的中数とはしるしをついたものを組合せると, どれかが的中している数

4. 的中とは連勝馬券の的中をいう

5. 平地競馬については6社の調査をしたが1社がわずか50レース分の資料しかないので削除した

北海道ばんえい競走売得金調

これはばんえい競走だけの売得を調べました。

年 度	市 営			道 営			合 計		
	日 数	売 得 額	前年度に 対する% (1日平均)	日 数	売 得 額	前年度に 対する% (1日平均)	日 数	売 得 額	前年度に 対する% (1日平均)
24				4	6,577,700		4	6,577,700	
25				5	5,382,600	65.00	5	5,382,600	65.00
26				12	24,239,900	137.64	12	24,239,900	187.64
27				12	32,135,700	132.57	12	32,135,700	132.57
28	7	17,837,800		14	31,537,800	84.12	21	49,375,600	87.80
29	14	34,094,200	95.00	9	20,444,700	100.84	23	54,539,200	100.85
30	16	40,904,500	104.00	14	28,464,300	89.5	30	69,368,800	97.51
31	19	54,130,700	111.44	12	36,221,400	148.46	31	90,352,100	126.05
32	22	66,912,900	106.76	17	47,667,900	92.90	39	114,580,800	100.80
33	30	94,631,700	103.71	18	47,976,400	95.06	48	142,608,100	101.12
34	28	108,601,100	122.96	19	68,544,700	135.35	47	177,145,800	126.86
35	31	119,002,200	98.97	22	91,705,700	115.55	53	210,707,900	105.48
36	31	152,505,300	128.15	18	77,453,000	103.23	49	229,958,300	118.05
37	38	224,489,300	120.18	9	45,423,300	117.29	47	269,912,600	122.37
38	46	327,705,300	120.59	9	50,902,300	112.06	55	378,607,600	119.87
39	50	409,608,200	114.99	12	91,281,700	134.50	62	500,889,900	117.36
40	50	435,655,900	106.35	12	96,715,400	105.95	62	532,371,300	106.29
41	66	805,750,700	140.11				66	805,750,700	140.11
42	66	1,050,038,600	130.31				66	1,050,038,600	130.31
43	66	1,351,840,000	128.74				66	1,351,840,000	128.74
44	66	2,091,395,400	154.71				66	2,091,395,400	154.71
45	66	2,483,879,800	118.76				66	2,483,879,800	118.76

昭和45年度 主催者別売得金成績

主催者	期別	売得金額	1日平均	賞金額	入場人員	1日平均
岩見沢	1	154,407,100	25,734,517	7,678,500	13,705	2,284
	2	286,705,100	47,784,183	7,976,000	15,042	2,507
	3	406,949,200	67,824,866	11,172,500	19,805	3,301
		848,061,400	47,114,522	26,827,000	48,552	2,697
旭川	1	268,060,800	44,676,800	9,387,500	16,140	2,690
	2	293,457,300	48,909,550	9,675,000	16,057	2,676
	3	345,422,700	57,570,450	11,412,000	17,303	2,884
		906,940,800	50,385,600	30,474,500	49,500	2,750
帯広	1	119,584,300	19,930,716	5,892,000	10,501	1,750
	2	182,347,300	30,391,216	6,745,000	17,053	2,842
		301,931,600	25,160,966	12,637,000	27,554	2,296
北見	1	117,524,000	19,587,333	5,545,500	11,713	1,952
	2	129,206,700	21,534,450	6,335,000	8,376	1,396
	3	180,215,300	30,035,883	6,416,000	11,132	1,855
		426,946,000	23,719,222	18,296,500	31,221	1,735
合計	11	2,483,879,800	37,634,542	88,235,000	156,827	2,376

参 考

道 営 競 馬 売 得 金 成 績

競馬場	期別	売得金額	1日平均	賞金額	入場人員	1日平均
札幌	1	618,097,700	103,016,283	12,895,000	52,676	8,779
	2	876,157,100	146,026,183	16,987,000	58,059	9,677
	3	795,203,300	132,533,883	19,018,000	33,042	7,174
		2,289,458,100	127,192,116	48,900,000	153,777	8,543
函館	1	202,392,900	33,732,150	17,629,000	11,735	1,956
	2	256,628,600	42,771,433	19,624,000	12,289	2,048
		459,021,500	38,251,791	37,253,000	24,024	2,048
岩見沢	1	482,091,500	80,348,583	16,970,000	27,390	4,565
	2	611,307,300	101,884,550	16,820,000	28,449	4,742
	3	762,570,100	127,095,016	20,090,000	36,184	6,031
	4	711,151,700	118,525,283	21,909,000	33,085	5,514
	5	833,669,900	138,944,983	24,405,000	37,919	6,320
		3,400,790,500	113,359,683	100,194,000	163,027	5,434
旭川	1	261,155,200	43,525,866	13,342,000	19,173	3,196
	2	291,141,900	48,523,650	14,684,000	18,479	3,080
	3	327,318,500	54,553,083	15,312,000	19,923	3,321
		879,615,600	48,867,533	43,338,000	57,575	3,199
帯広	1	165,761,200	27,626,866	11,444,000	10,869	1,812
	2	222,573,800	37,095,633	12,988,000	13,300	2,217
	3	224,398,500	37,399,750	13,375,000	13,955	2,326
		612,733,500	34,040,750	37,807,000	38,124	2,119
合計	16	7,641,619,200	79,600,200	267,492,000	436,527	4,547

昭和四十六年度 賞金・諸手当

○賞金

一二七、六〇四、〇〇〇円

岩見沢市

五一、五二四、〇〇〇円

旭川市

四三、二〇〇、〇〇〇円

帯広市

一三、四四〇、〇〇〇円

北見市

一九、四四〇、〇〇〇円

○出走奨励金

出走馬一頭につき次より支給する。

岩見沢市・旭川市

A級 一八、〇〇〇円

B級 一五、〇〇〇円

C・三才級一三、〇〇〇円

D級 一〇、〇〇〇円

帯広市・北見市

A級 一五、〇〇〇円

B級 一二、〇〇〇円

C・三才級一〇、〇〇〇円

D級 七、〇〇〇円

○着外賞金

競走番組で定める以外の着外馬

に対し、一競走につき次の区分で支給する。

普通競走(六ノ入着)

A級 四、五〇〇円

B級 四、〇〇〇円

C級 三、〇〇〇円

D級 二、〇〇〇円

三才級 三、五〇〇円

特別・重賞競走

A級 五、五〇〇円

B級 五、〇〇〇円

C級 四、〇〇〇円

D級 三、〇〇〇円

三才級 四、五〇〇円

○特別報賞金

A 出走投票するも、その競走が不正立になった場合には、その競走の五着賞金に相当する金額を、出走投票をした馬に支給する。

I 同枠除外の場合は当該競走の三着賞金相当額を支給する。

○輸送奨励金

出走した馬の馬主に対し、一期一頭二、〇〇〇円を支給する。

○騎乗奨励金

出走した全馬の騎乗者に対し、一騎乗につき八〇〇円(税込)を支給する。

○騎手賞金

次の区分により支給する。

普通競走

一着 一、〇〇〇円

二着 六〇〇円

三着 四〇〇円

特別・重賞競走

一着 一、五〇〇円

二着 九〇〇円

三着 六〇〇円

○調教奨励金

調教騎手に対し、出走した調教管理馬一期一頭につき、一、五〇〇円を支給する。

○馬管理者奨励金

馬管理者に対し、出走した管理馬一期一頭につき一、〇〇〇円を支給する。

○厩務賞金

競走に出走した馬の厩務員に対し、次の区分により支給する。ただし、失格および競走中止の場合は支給しない。

一着 六〇〇円
二着 四〇〇円

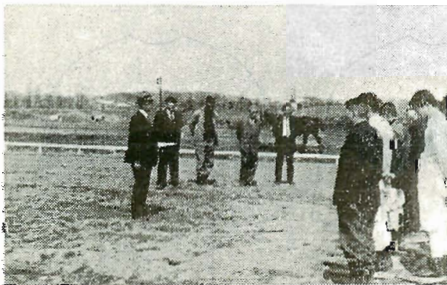


騎手養成講習会

昨年四月二十一日より二十三日までの三日間北見市役所の競馬関係職員の大々な協力により、北見市労働会館において将来ばんえい競走を背負って立つ若い騎手さん達(三十一才以下)を対称にして行ないましたが、ご老体(失礼!)の騎手さんも、ぜひ参加させてくれと、自主的に参加され本会は予想外のことで、うれしい悲鳴をあげました。参加人員は三十七名で、地方競馬全国協会より、田中、東岡先生また北見市役所より坂井先生を招き、競馬の概要・馬学・衛生学などの講義をいただき、有意義な講習会でした。

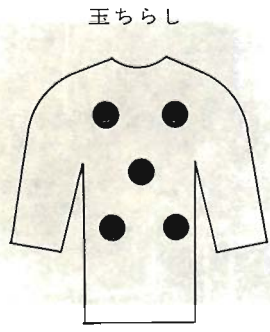
○出走報償金

本年度四競馬場に出走し最終の旭川競馬に出走した馬一頭につき三、五〇〇円を支給する。



青のこぎり歯形	茶のこぎり歯形	緑	紫	青	赤山形一文字	紫一文字	黄元ろく	黄玉ちらし	紫	赤星ちらし	黄	紫たすき	桃	黄	赤洞一本輪	桃	白	赤	茶	紫	青	桃	黄のこぎり歯形	赤	茶	紫	青	黄	桃山形一文字	桃一文字	緑地
田上	南坂	沢田	長野	大野	橋本	山田	坂本	吉村	本村与惣治	相内	平野	片平	西村	渡辺	日詰	晴坂	小林	上田	橋本	久保	山下	夏井	七条	松原仁三郎	山本	越智	木村	鬼頭	本沢	前原	下田
正	俊雄	博	清勝	利幸	豊	勇作	和昭	信儀	悠治	常俊	清茂	俊悦	栄治	定雄	政幸	孝治	正一	力	幸治	正吉	正光	孝	好春	浩	輝雄	武己	卓司	兼一	政一	芳郎	和実
紫	茶	黄	赤たすき	桃	茶	黄洞一本輪	黄	茶	紫	黄	赤のこぎり歯形	茶	青	赤星ちらし	緑元ろく	白一文字	青地	赤山形一文字	白	緑	桃	青	桃	緑	紫	赤たすき	白	青洞一本輪	緑	赤	
石川	中村	坂下	置田	小柳	谷内	佐々木	尾谷	畠中	中川	中条	後藤	井家	西邑	金山	辻本	嘉見	相馬	上田	西邑	相馬	廣富	長沢	長部	長部	中西	白瀬	原田	氏家	佐々木	佐伯	
重吉	清信	弥作	春雄	信一	二三松	繁	正	芳勝	正三	照雄	清	昭一	春雄	明彦	誠作	次夫	光行	吉隆	春雄	光行	幸雄	豊秋	正二	宗	関松	宗	斉	昭	文雄	義則	
青のこぎり歯形	黒	赤地	白一文字	赤山形一文字	赤山形一文字	赤玉ちらし	赤	紫	青	茶地	桃星ちらし	桃洞一本輪	白	黄たすき	青	赤	黄洞一本輪	黄たすき	白	桃	青	桃	黄のこぎり歯形	桃	赤	青	黄	茶一文字	紫地	地	紫玉ちらし
太田	木村	武田	菅原	小畑	大村	藤川	黒沢	平田	宇高	和田	岩瀬喜代美	三浦	三浦	太田	高垣	鶴沼	重田	太田	孝幸	孝幸	太田	重田	小倉勇三郎	元木	山本	大友	林	桑原	淵上	沢部	幸雄
啓一	哲男	喜一	政男	勲平	雄三	晴雄	義雄	正一	輝次	久雄	三浦	三浦	三浦	太田	俊男	正吉	清	博	孝幸	孝幸	博	清	兵二	幸一	幸一	栄司	正男	太市	昭一	太市	忠

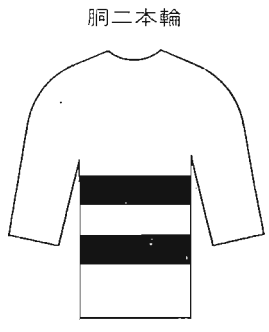
騎手服色一覧



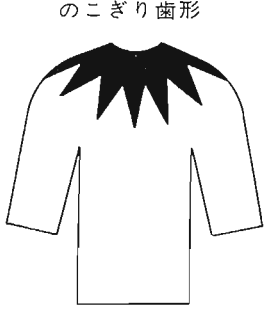
玉ちらし



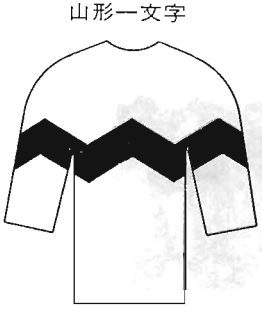
たすき



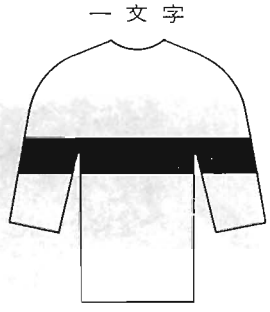
洞二本輪



のこぎり歯形



山形一文字



一文字

桃地	白地	黒地	"	"	"
緑	青	黒	黄	青	紫
"	山形一文字	青たすき	白元ろく	青のこぎり歯形	赤のこぎり歯形
野々宮	小里	光富	石川	東川	東川
重樹	弘昭	駿一	正	山本	山本
			武	幸一	幸一

マスコミにもてはやされた ばんえい競馬

☆ 人気作家 佐藤愛子氏のル

ポ

昨年七月三十一日発行の週刊朝日に現代の人気作家佐藤愛子さんのルポが四頁にわたり、さし絵入りで掲載されている、題して「もう、都会はいやよ、北海道のばんえい競馬で生き返った私」

その見出しをひろってみると

1 ああ 素朴な姿、自然な心よ
今いづこ

2 主人の面目をかけ馬は馬力で
頑張る

3 観客様はこれぞなつかし日本
人の顔

4 でかい！人間なら清海入道か
弁慶か

5 立往生する根性なき馬まさに
人生だ

6 今どきの若者の如くふてくさ
れた馬も

7 いちややつき人間よ健気な馬を
見習え

都会の喧燥と下俗から逃れて、当日はあいにく雨の中であったが、主催者にも知らさずに岩見沢は、ばんえい競馬をみて帰られたようである。

ばんえい競馬

☆ 万博と結ぶテレビ放送

同じく八月三十一日北見ばんえい競馬と万博を結ぶNHKテレビ放送があった。

ちょうど午後一時半からで開催中のため残念ながら北見競馬勤務中の者は見る事ができなかったが翌朝には再放映があった。

アナウンサーと市の坂井係長の歯切れのいい応答に騎手諸氏も十名ばかり出て、万博会場ではソ連万博駐在員の母国のトナカイ競走の話などを織り込んで、なかなか好評だった。

☆ 人気テレビ番組「圭三訪問」に登場

十一月八日には岩見沢でテレビの人気タレント高橋圭三氏を迎えてHBCの全国カラー放送があった。

これより先き十月三日には現地録画撮影をやったが、総勢四十人を越すカラーテレビ録画撮影隊は市街のお寺などに泊り込み、朝は五時前から出かけるという忙しさ。

当日は市の小倉主幹、市協の内田事務局長がゲストとして出演し

老雄トキミノルは歴戦の功績を物語るメダルを首一杯につけて山本幸一騎手とともにカメラにおさまった。

馬場では大村、宇高、暗坂騎手などが圭三氏と対話した。天候も幸い快晴で、前々日に尺余も降り積った雪が場内のあちこちに残っており、北海道らしいとスタッフは大よろこび、人気者圭三さんの名調子でばんえい競馬は全国で紹介された。

☆ ラジオ放送

八月の帯広では中西騎手が、九月には北見で中村騎手が「ばんえいととも」に二十年の生活記録をそれぞれ三十分番組で放送している。中西騎手の放送はレコードに再録されて市協にも寄贈があった。

☆ 佐藤愛子さんのルポより

「ばんえい競馬というものは、明治二十四年の秋に岩見沢の鳩ヶ丘という丘ではじまって以来年中行事の一ツとして、農民が楽しみにつづけてきたものである。いつもは畑を耕し農具や雑穀を運んだりして一生懸命働いている馬が、今日はお祭りとして労働から解放され、人と同じ朗らかな心になって米俵引っぱって競走する。

ここにこそ本来の馬の姿があり、遊びの精神があるのではないか

私はひとりで感動した。

遊びというものは、働きにつながらねばならぬ、中央競馬会の馬などけしからぬ（馬ですぞ）競走し金を稼ぐために美食してカッコよくなり、タテガミをミツアミにしたりして気取っている。

岩見沢は雨であった。久しぶりでドロコぬかるみを歩く、東京の暮しのなかからはもうぬかるみというものが姿を消した。このような



るとぬかるみ、馬のウソコ、なんでもうれしい！女史独特のザックパランな筆致でばんえい競馬の、

楽しいふんい気が描かれていく、そしてまた

「まさにここに人生がある。コンチクショウと思う馬は頂きを踏越える。もうあかん、とすぐに思うような根性なき馬は立往生して塗方に暮れた顔、他の全部の馬が引揚げてしまったのを見て、ゴロリと横ざまに転がってふてくされている。馬の中にも今どきの若者みたいな馬がいるのである。まったく馬の人生はきびしい。人間の世界にはこのように鞭うつ人がいなくなった。

だから人間は山頂をめざすことをやめて、セリ上がりベットの上でいちやついて喜んでいる。そういう手合は北海道岩見沢へ行っているこの健気な馬たちの奮闘努力を見習うがよい」とむすんでいる。

このむすびの文章は圭三さんが引用して「圭三訪問」の末尾のことばとしている。

ばんえい競馬は年々歳々競馬の公正を期して近代化をすすめているが、一面このような期待にもこたえて、そのもつとも大切な素朴さを失ってはならない。

それは普通の競馬が「都会的軽快美」なら、ばんえい競馬は「郷土色あふれる野性美」であってよいと思う。

5. 昇格・昇級および積載重量基準

資格	級	積載重量	基準
A	1	630K	20.0万円毎に 10K加増
	2	600	17.0万円以上 1 へ
	3	570	16.0万円以上 2 へ
	4	540	15.0万円以上 3 へ
B	1	540K	18.0万円以上 A 3 へ
	2	510	12.0万円以上 1 へ
	3	480	11.0万円以上 2 へ
	4	450	10.0万円以上 3 へ
C	1	480K	16.0万円以上 B 3 へ
	2	450	11.0万円以上 1 へ
	3	420	10.0万円以上 2 へ
	4	390	9.0万円以上 3 へ
D	1	420K	13.0万円以上 C 3 へ
	2	390	10.0万円以上 1 へ
	3	360	8.0万円以上 2 へ
	4	330	7.0万円以上 3 へ
	5	300	6.0万円以上 4 へ
三才	1	350K	20.0万円毎に 10K加増
	2	330	14.0万円以上 1 へ
	3	310	11.0万円以上 2 へ
	4	280	9.0万円以上 3 へ

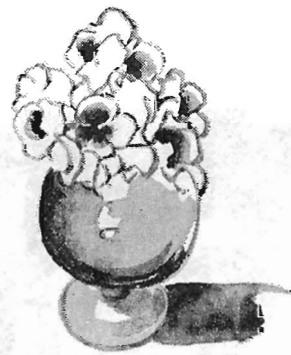
摘 要

- 昇格昇級基準額は平場1・2・3着、重賞および特別1～5着までの取得賞金の合計とする。
- 本表における昇級は最高2階級までに止める。

2. 薬物検査陽性馬の措置について 昭和46年度薬物検査陽性馬の措置

	摘 要	置
馬	1. 出走拒否3開催、以後 回につき3開催加算 2. 前年度の拒否馬については1回目出走拒否→開催以後1回につき3開催加算	
調 教 師	1. 1頭の場合 (1) 始末書 2. 2頭以上の場合 (1) 始末書 (2) 全調教馬に対する1期間の調教奨励金は支給しない	
管 理 者	1. 1頭の場合 (1) 始末書 2. 2頭以上の場合 (1) 始末書 (2) 全管理馬に対する1期間の馬管理奨励金を支給しない	

- 昇格昇級基準金額に達しなお残額がある場合は、その金額の残は新級の取得賞金とする。
昇格および2階級昇級の場合には切捨てる（重量による昇級も含む）
- 前年度農林大臣賞授賞馬は規定競走において20K加増する。
- 昇格の場合、取得賞金額が基準に達するも重賞、特別競走の1着（2着よりの場合も含む）のないときは1期間昇格を延期する。
- 初出走以降10競走以上出走するも取得賞金額のない馬は降格降級することがある。
- 降格降級は現資格級より2級下位までとする。
- 昇格昇級した馬は降格降級しない。
- 開催期間中は昇格昇級または降格降級しない。
- 特別競走・重量競走等規定競走以外に出走する馬の加増条件は番組表で発表する。
- 本表に定める以外の必要な事項については番組編成会議で別に定める。



昭和46年度北海道市営競馬番組編成要領

1. 出走馬の資格

- ア 地方競馬全国協会の登録を受けた馬（北海道の登録を有する馬は、全国協会の登録を受けたものとみなす）
- イ 明13才以下の馬
- ウ 体重650kg以上の馬
- エ 本年度能力調教検査に合格した馬
- オ 本年度伝負検査を受けた馬

2. 出走の制限および拒否

- (1) 尋常でい鉄を使用しない馬は出走できない。
- (2) こ疾のある馬は出走の制限を強化する。
- (3) 競走終了時刻後治療をした馬は翌日の出走を拒否する。
- (4) 出走取消をした馬は、その回の残余期間出走を拒否する。
- (5) 悪癖馬および失明馬（片眼馬を含む）は出走を拒否する。
- (6) 出走申込をし交通事故などやむをえない理由のほか入厩しない馬は、爾後申込を拒否する。

3. 競走の取り止めおよび出走頭数の制限

- (1) 出走馬が5頭以下の場合はその競走を取り止め新たに競走を設けることがある。ただし偶発的事故または疾病により出走取消し、競走除外、発走除外、または出走の停止を開催執務委員長が認めた場合を除く
- (2) 出走頭数は1競走10頭までとし、能力差などにより頭数を配分する。

4. 格付基準について

A 体重制格付について

資格	A	B	C	D	3才
体重	901K以上	900K以下 811K以上	810K以下 731K以上	730K以下 650K以上	650K以上

- (1) 格付は昭和46年度出走する第1回目の馬体検査時に計量格付する。
- (2) 前年度出走馬にて、体重により降格する場合は、前年度最終格付より1資格下位の2級からとする。ただしDの場合は3級からとする。
- (3) 下記該当馬は前年度成績により格位する。
 - ア A級馬でA4以上昇級した馬はA格付とする。
 - イ A級馬でA1以上に昇級した馬はA3からとする
 - ウ 昇格後、2階級以上昇級した馬は前年度の最終資格の下位からとする。
 - エ 体重による昇格馬も含む。
- (4) 農林大臣賞授賞馬はA級に格付する。
- (5) 4才馬は50Kに減量して格付し、A級に格付しない

B 体重による昇格昇級について

- (1) 第2回目以降の馬体重は前開催の平均体重とする。
- (2) 第2回目以降の計量で、2資格以上上位の体重に増量した馬は、1資格上位に格付する。B級については資格基準の最高重量より100K以上増量の馬はB1に昇級する。
- (3) 第2回目以降の計量で資格基準の最高重量より50K以上の体重に増量した馬は2階級昇級する。ただし体重による昇級は各資格とも最上級までとする。

競走馬

預託料基準額

馬主会および騎手会の合同代議員会において協議の結果、競走馬預託料基準月額を次のとおりとすることに協定した。

一、預託料基準月額

四〇、〇〇〇円

二、進上金

本賞金の二〇%

三、馬主、調教師間において

この基準額によらないで別に料金を定めて契約することは、随意である。

四、馬の診療費・装飾料・輸送費

・申込料その他馬主の負担すべき経費（例馬主会費など）は馬主の負担とする。

五、預託の条件精算の方法などについては文書をもって契約することが望ましい。



昭和46年度北海道市営競馬開催日程

○は日曜祭日

5月	1	②	③	4	⑤	6	7	8	⑨	10	11	12	13	14	15	⑩	17	18	19	20	21	22	⑬	24	25	26	27	28	29	⑳	31
6月	1	2	3	4	5	⑥	7	8	9	10	11	12	⑬	14	15	16	17	18	19	⑳	21	22	23	24	25	26	⑳	28	29	30	/
7月	1	2	3	④	5	6	7	8	9	10	⑪	12	13	14	15	16	17	⑱	19	20	21	22	23	24	⑳	26	27	28	29	30	31
8月	①	2	3	4	5	6	7	⑧	9	10	11	12	13	14	⑮	16	17	18	19	20	21	⑳	23	24	25	26	27	28	⑳	30	31
9月	1	2	3	4	⑤	6	7	8	9	10	11	⑫	13	14	⑮	16	17	18	⑱	20	21	22	23	⑳	25	⑳	27	28	29	30	/
10月	1	2	③	4	5	6	7	8	9	⑩	11	12	13	14	15	16	⑰	18	19	20	21	22	23	⑳	25	26	27	28	29	30	⑳
11月	1	2	③	4	5	6	⑦	8	9	10	11	12	13	⑭	15	16	17	18	19	20	⑳	22	⑬	24	25	26	27	⑳	29	30	/

昭和46年度北海道競馬開催日程

○は日曜祭日

5月	1	②	③	4	⑤	6	7	8	⑨	10	11	12	13	14	15	⑩	17	18	19	20	21	22	⑬	24	25	26	27	28	29	⑳	31
6月	1	2	3	4	5	⑥	7	8	9	10	11	12	⑬	14	15	16	17	18	19	⑳	21	22	23	24	25	26	⑳	28	29	30	/
7月	1	2	3	④	5	6	7	8	9	10	⑪	12	13	14	15	16	17	⑱	19	20	21	22	23	24	⑳	26	27	28	29	30	31
8月	①	2	3	4	5	6	7	⑧	9	10	11	12	13	14	⑮	16	17	18	19	20	21	⑳	23	24	25	26	27	28	⑳	30	31
9月	1	2	3	4	⑤	6	7	8	9	10	11	⑫	13	14	⑮	16	17	18	⑱	20	21	22	23	⑳	25	⑳	27	28	29	30	/
10月	1	2	③	4	5	6	7	8	9	⑩	11	12	13	14	15	16	⑰	18	19	20	21	22	23	⑳	25	⑳	27	28	29	30	⑳
11月	1	2	③	4	5	6	⑦	8	9	10	11	12	13	⑭	15	16	17	18	19	20	⑳	22	⑬	24	25	26	27	⑳	29	30	/

厩舎管理改善

委員会委員

昭和四十六年の委員の方々が
まりましたのでお知らせします。

- 委員長 宇高輝次
副会長 中西松次
委員 晴原仁三郎、上田吉考、大友隆治、鬼頭兼一、木村与治、小瀬太一、佐々木繁一、坂本和昭、重田清俊、定塚男、土塚威、中本信、野宮重樹、橋本幸雄、広富雄一、平田正一、藤川晴一、三浦信忠、吉村信忠、山本幸一、山田勇作

リーディングジョッキー



山田 騎手

昭和45年

1位	山田 勇作	1着	52	2着	48	3着	38
2位	中西 関松	"	44	"	39	"	43
2位	^{上ふ} 山本 幸一	"	38	"	39	"	41
4位	松原仁三郎	"	28	"	27	"	30
5位	定塚 俊男	"	21	"	21	"	15
6位	鶴沼 武	"	24	"	17	"	16



中西 騎手

昭和44年

1位	中西 関松	1着	67	2着	52	3着	39
2位	^{上ふ} 山本 幸一	"	50	"	38	"	36
3位	松原仁三郎	"	31	"	27	"	28
4位	藤川 晴雄	"	29	"	22	"	31
5位	前原 芳郎	"	34	"	19	"	18
6位	七条 好春	"	21	"	29	"	21

昭和43年

1位	中西 関松	1着	86	2着	48	3着	47
2位	松原仁三郎	"	52	"	45	"	48
3位	鬼頭 兼一	"	34	"	47	"	33
4位	上田 吉隆	"	36	"	28	"	38
5位	山田 勇作	"	30	"	37	"	31
6位	重田 清	"	30	"	32	"	20

昭和42年

1位	中西 関松	1着	93	2着	70	3着	44
2位	^{上ふ} 山本 幸一	"	53	"	40	"	27
3位	松原仁三郎	"	55	"	30	"	27
4位	上田 吉隆	"	34	"	43	"	45
5位	木村与惣治	"	27	"	22	"	23
6位	尾ヶ瀬富男	"	27	"	24	"	13

昭和41年

1位	中西 関松	1着	114	2着	77	3着	62
2位	^{上ふ} 山本 幸一	"	45	"	39	"	45
3位	上田 吉隆	"	36	"	42	"	41
4位	七条 好春	"	48	"	27	"	26
5位	鬼頭 兼一	"	34	"	40	"	29
6位	大友 栄司	"	22	"	29	"	24



松原 騎手

発走技能賞

昭和45年

1位	松原 仁三郎
2位	吉村 信義
3位	平田 正一
4位	藤川 晴雄
5位	早勢 敏

昭和44年

1位	松原 仁三郎
2位	早 敏 勢
3位	三 浦 忠
4位	平田 正一
5位	山田 勇作



吉村 騎手

昭和46年 4 月

札幌市北 4 条西 4 丁目労金ビル 5 階(TEL) 代表 221-9171